

—はじめ、排除をこえて、

子ども社会の再生に立ちむかう集団づくりを追求しよう—

1. はじめに—前年度基調とその後の研究活動—

前年度の基調提案は、校内暴力期の子どもの分析を教訓に、今日の子どもの問題性の分析を重視したものである。自分本位的性格（心性）をキーワードに、次のような分析を提起した。

〈小学校の荒れをどうみるか〉

自分本位的性格（心性）は、発達過程において、家族の交わり、地域社会、子どもの世界の中で、社会性の発達によってそぎ落ちていくものであるが、幼児期の自分本位的心性がそぎ落ちないまま少年期を迎える子どもたちは、自分本位的心性を抱えつつ仲間を求める欲求にさらされ、自分本位的に仲間を求めることになる。それは校内暴力期の人間関係のメカニズム同様、なれ合いを軸とした身内関係と自閉と敵意を軸にした他人関係となり、身内関係のコミュニケーションとしての商業文化を排除する学校文化に対し、自閉し敵意をもつことになる。この悪性化の進行が高学年において攻撃性、破壊性の表出となっているのではないか。

〈中学生の事件をめぐる〉

少年期において自分本位的心性が悪性化していくことなく過ごした子どもたちにとっても、豊かな少年期が保障されたわけではない。自分本位性を内包しながら学校秩序から逸脱せずに耐えつづけた子どもの中に、内包された自分本位的欲望をバーチャルリアリティーの世界で悪性化させつづける子どもが発生する。神戸の少年や黒磯のナイフ事件の少年のように、なにかのひきがねが、現実世界での行動となっていくのではないか。学校を離反した子どもたちのつくる人間関係は、自分本位的欲望の自分本位的実現の中で、すさまじくダーティーな行動となり、その身内関係もしくは他人関係の中で起こる事件が浮上している。京都市内の中学生殺人事件もこの関係の中で起こっているものではないか。

これらの背景として、

- ①自己努力、自己責任を基本とした親たちの生き方が、子育てに投影され、子どもたちが子捨ての恐怖の中で学習に追い込まれている。
  - ②新自由主義的な商業主義のターゲットにされ、物質的欲望をかきたてられる子どもたち。
  - ③少年期を中心とした、発達条件としての子ども集団の変質（消失）。
  - ④自由保育、新学力観によるもの。
- を挙げている。

京生研の基調が発表された後、近畿全国委員連絡会は、近畿地区学校に向けて基調提案

づくりにとりくむが、執筆の船越勝は、全能感をキーワードとして、子どもの問題状況の分析をしている。

幼児期の子どもたちは、本来、親をはじめとした信頼できる大人によって保護されることによって、他者と自己に対する信頼を発達的に獲得することができる。これが幼児期的な「全能感」の源泉である。そして、次に、他の大人や同年齢の友だちなど対他関係の豊かな発展の中で、約束・ルールの世界を媒介として、幼児期的な全能の世界を離脱して行くのである。ところが、現代の子どもたちはたとえば、一方では、子どもたちを「よい子」に育てるという名目の下に超早期教育に囲い込むために、「全能感」を過少にしか獲得することができず、その結果それを取り戻そうと過剰に全能感の世界にこだわったり、他方で、対他関係が母親との関係に局限化され、しかも子どもの身の回りのことをすべて母親がサービス主義的にすることによって、彼らをして幼児的な全能の世界から離脱することができず、その結果幼児的な「全能感」を引きずったりすることになっている。

つまり、子どもたちは幼児期的な「全能感」の獲得と離脱という点で、以上のような発達的な課題があるところに、先に指摘したように、教育内容をはじめとして、詳細は略するが、家庭や消費社会を通して、「何をやっても自由」という新自由主義のイデオロギーが幼児期的な「全能感」と癒着し、子どもたちは「全能感」に囚われ、そのまま引きずることになるのである。

自分本位的心性、全能感と、キーワードは違えど、ともに今日の子どもたちが幼児期からの発達の未熟さを抱え、未熟なままに他者と交わり、子どもの関係性が歪み、今日の問題へとつながっているところに、問題意識をもっているのである。

## 2. あらためて、子どもの問題を分析する

「世界の中において安全であるという感覚、すなわち〈基本的信頼〉は人生の最初期において最初にケアをしてくれる人との関係の中でえられるものである。人生そのものと同時に発生するこの信頼感はライフサイクルの全体を通じてその人を支えつづける。それは関係と信仰とのあらゆるシステムの基礎を形づくる。人間の最初の体験はケアされたということであり、このことが人間にその所属する世界の方を向く力を与えるのである。」(ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復』みすず書房)

このように、基本的信頼は、幼児の自分本位的欲求を受け止め保護してくれる他者との間で形成される。これは幼児的全能感の獲得の過程である。この基本的信頼をもとに、他者との関係に、社会に参加していき、全能感からの離脱(自分本位的心性のそぎ落とし)をしていくものである。

基本的信頼獲得が不十分な子どもは、保育所、小学校低学年で、自分本位的な欲求のまま行動し、秩序破壊、友だちとのトラブルをくり返すことになる。それらの多くは、虐待、放置にさらされた子どもであり、基本的信頼感のもとに全能感の離脱を果たしていないの

で、自分本位的な欲求を他者に向けることになる（基本的信頼の獲得要求でもある）。しかし、母親のように、ケアしながら統制をうながす対応にはならず、強い抑圧を受けることになり、表面上秩序に従いつつも子どもの世界で自分本位性をもれ出させる子となったり、抑圧に耐えられずに、激しくアクティングアウトする子どもが出るのである。

虐待、放置にさらされた子どもほどではなくても、全能感の過小により、他者への甘えと依存を強くもつ子どもも、今日の早期教育、親の多忙さ、さらには若年両親の増加などを背景に増えている。少年期にさしかかる子どもたちは、子ども集団を形成し、行動的に親から自立しようとする。子どもが、子ども社会を形成し始めるのである。このとき、アクティングアウトした子どもたちをはじめとして、子どもの自分本位性は、他者との関係の中に反映し、身内になれ合いを軸とした関係、外に対しては敵意を軸とした自閉と排除の関係となる。

子どもたちの社会が、なれ合いの身内関係と、排外的対他関係によって広がる中で、いじめと排除を代表とする、身体、物、人格への侵害が日常化し、荒れが学級を襲い、学級崩壊事態を発生させるのである。子どもが自らの力で子ども社会を形成する社会は、子どもにとって自立の大きな条件となるものであるが、社会制作の能力が未熟なために、社会維持を前提とし、ルールに基づくものとはならず、力と暴力による支配と被支配の関係によって行われることになる。子ども社会は「戦争状態化」していると全生研基調は述べているが、戦争状態化の中で、子どもたちは心的外傷を受け、PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しんでいると見るべきではないかと思う。

「外傷的事件が一時的効果を与えるのは、自己の心理学的構造だけでなく、個人と社会をつなぐ意味と感情的紐帯とのシステムに対してでもある。外傷的事件は被害者のもつ、世界の安全性に関する基礎的前提を破壊する。自己の積極的（肯定的）価値を破壊し、創造された世界を破壊する。」

基本的信頼を獲得できなかった子どもの、自分本位的欲求のアクティングアウトを中心に、子ども社会の「戦争状態化」が、それまでの基本的信頼を獲得してきた子どもにも、その破壊を生み出してくるのである。

荒れの中心となり、小学校低学年からアクティングアウトした子どもも、荒れの中で、基本的信頼を取り戻せはしない。それどころか、自分本位的心性を肥大させ、自己に振り回され、よりダーティーな世界に入り込むことになる。学校秩序から外れた世界で甘えと攻撃性を強めていく。また秩序にとどまる子どもたちは、やさしさごっこで外にはカムフラージュした、洗練されたいじめ、排除の安定した社会へと進む。

このように、子どもたちは、「戦争状態化」をくぐりぬけるが、自立（親からの）の条件としての仲間を失っていることの問題は大きい。行動的自立を獲得すべき少年期の子ども集団の変質、そして、精神的自立のための思春期の仲間を失うということは、親との関係性が変化しないまま大人になっていくということである。かくして、基本的信頼感のうすい親子関係が反映し、親の抑圧をダイレクトに受け孤立し進路決定期に行動を乱す子どもが多くなっている（進路放棄、ドロップアウト、無気力）。

### 3. 少年期の発達課題と子ども社会の価値

#### 〈子ども社会の形成と発達〉

少年期にさしかかり始めた子どもたちは、それまでの、親の眼の届く範囲内の、ごく身近な友だちとの遊びの世界から、少しずつ、ダイナミックな、そしてスリリングな遊びの世界をリーダー的な子どもの下につくり始める。そして、それまでの、ごっこ遊びの世界

からルール遊びの世界へと変化する。本来このルールとは競技ルールのように完成されたものではなく、遊び仲間の規模、時間、空間、技術等によって自由に改変できるルールであり、構成員の自己決定によるものである。ルールをもとに遊びが進行しだすと、様々な逸脱をも掟というルールに基づきやり始めることになる。このころになると、成員は集団のルールこそが規範となり、それまでの親からの価値観との対立も集団の規範を優先し始め、行動的自立を獲得するのである。

この集団形成に参加する中で、子どもたちは社会の一員としてのあり方を学ぶのであるが、この社会は子ども社会特有のものである。

### 〈大人社会のシェルターとしての子ども社会の価値〉

集団の規範、ルールの下に機械的平等に扱われ、従えない子やルールを私物化する者には、ペナルティーとしてのイジメやボス退治をする。同質がゆえに同等になる。この同質同等の厳しい掟のさらに重要な価値は、遊びを保障してくれる仲間とつくる社会を維持することである。遊びを保障する社会維持を至上価値とするが故に、さまざまなトラブルも社会崩壊をきたさない程度の解決で合意し、この営みを通して子ども社会特有の価値観をつくり出すのである。

たとえば、ドッジボールや野球も、勝ち負けを必死に追求しつつもチームは公平に分ける。そのために残酷とも思える「トリのジャンケン」も承認するのである。公平な条件のために特例としてのルールも認めるのである。また、結果にこだわり、判定をめぐるトラブルも敗因追及も、そこそこで収めるのは、社会維持のためであり、結果より過程、仲間への追求と援助の思想も身につけていく。

これらの価値すべては社会正義として子どもたちの内面にしみこんでいき、子ども社会の価値が時として大人の社会の価値観からのシェルターとなる。とくに個々の親の発する個人主義的な発想による要求や、仲間の批判に対して、対峙するものとなり、来るべき思春期へといざなう要因となるのである。

### 〈子ども社会の変質が生み出すもの〉

先にみたように、子どもは楽しい遊びを保障してくれる子ども社会の維持を至上の価値とすることにより、ルール、規範のもとに対等で、社会維持の営みに必要な子ども社会の価値観を身につける。我々教師は、この子ども社会の正義に依拠して指導を展開してきたのであり、公平であることの要求、不正に対する怒り、結果よりも過程の努力、批判と援助の思想は、指導によってつくられたものではなく、子ども社会の倫理に訴え、[それに子どもたちが] 呼応する反応であったと言える。今、このような価値に呼応しない子どもを目の前にたじろぐことが多いが、子ども社会の変質を正しくとらえるなら、嘆きが無意味であることがわかる。

先に挙げたように、幼児期の基本的信頼を欠落させた子どもの荒れ、全能感に振り回され離脱できない子どもたちの社会形成は、自分本位的な関わりが広がり、なれ合いの身内と、他者への排除、攻撃があふれる中で進行する。ルール形成による遊びは、刹那的な面白さ追求に変わり、ゲーム遊びは、大人に囲われた競技社会の価値にのっとられてしまう中で、力・暴力が支配する社会に変質している。

子ども社会が完成する頃には、その頂点には、学力、スポーツ能力の優秀な者、女らしさの商業ペースの先頭を行く者が立ち、虐待、放置によってアクティングアウトしてきた者は、この少年期集団においても、甘えと依存の大きさゆえに親密さを獲得できずにダー

ティーな世界へと排除される。

彼らの甘えと依存の要求は、幼児期に否定されたばかりか、少年期にも否定され、教師に求めるが、受け入れられ始めれば際限なく寄りかかりつつ、拒絶の恐怖をいつも抱えるがために、激しい攻撃性と表裏一体である。

今日の困難を目の前に、我々の実践はどうあるべきなのか。

#### 4. 子ども社会の再生にいとむ実践を

##### (1) アクティングアウトする子どもにどうとりくむか

彼らの行動の自分本位性は確かにすさまじく、秩序の枠にとどまっている子どもと一線を画したくなる。しかし、多くの子どもたちの自分本位性の、より強力な自分本位性が故に排除され、ダーティーな世界を形成するのである。同質の問題にとらえ、彼らへのとりくみをすすめなくてはならない。

##### 〈受容と共感〉

彼らの多くは、虐待、放置にさらされ、心的外傷ストレスに近い状況にあると見るとき、前述の『心的外傷と回復』による示唆は大きい。

「基本的安全が再建されたならば、生存者が次に他の人々の助力を求めるのは自己への肯定的な見方を再建するためである。親密性（甘え）と攻撃性とのバランスをとる能力は外傷によって破壊されており、ぜひとも再建する必要がある。それは、他の人々が生存者の近しさを求め距たりを求めて動揺する欲求に対して寛容さを示し、また自立と自己管理とを再建しようとする意向を尊重しなければならない。（生存者の）攻撃性がほしいままにほとぼしるのを我慢しなければならないというのではない。そのような寛容は実際に非生産的である。結局は生存者の罪責感と羞恥の重さを増すからである。そうではなくて、自分には個人としての価値があるのだという感情を取り戻すためには、誕生後数年間にみられる自己価値観の本来の成長の土台となっていた自立心に対する尊厳と全く同じ顧慮が必要である。」（『心的外傷と回復』93ページ）

「発達途上の子どもの肯定的な自己感覚はケアしてくれる人が権力をおだやかに使ってくれるから生まれるのである。親が子どもよりはるかに強力であるのに、子どもの個人性と尊厳性を示してくれるからこそ、子どもは価値を与えられ、尊敬されていると思い、自己評価を発達させる。」（同77ページ）

我々が提起した「共感」とは、たんなる受容ではない。ありのままの彼の悩みを肯定しつつ、今の彼に無理なこと、かえって苦しめることは要求せずに、発達の過程を見定め、出来得ることを援助とともに要求することであり、いずれくる要求の時期のために今は許すことである。具体的には、一般的学校秩序や硬直化した「ねばならない」という学校的価値、社会通念としての子もらしさ、男らしさ、女らしさの価値観においてはやわらかく、社会を破壊するような言動、他者の物・身体・人格への侵害には断固として社会的責任を追及する姿勢である。

この具体的展開は、西ノ岡中学校の森本レポートのSや、瀧本実践の謝罪のとりくみの中に教訓がある。自らの行為の社会的責任を取らせ、自己の行為と向き合う力をつけつつ、自己の行為の背景となるものと向かい合わせていくことが大切である。アクティングアウトする子の行為は、他者への侵害の場合、自らも侵害を受け続けてきた経験を持つことが多い。自らの侵害行為と被侵害行為を整理し、彼を抑圧したものに共闘する関係をつくりあげていくことこそ、共感から共闘へのテーマである。

### 〈ダーティーな子ども社会への切り込み〉

ダーティーな社会を形成する子どもたちは、ダーティーさはさておき、社会の構成員となることは肯定面としてとりくまなければならない。彼らの社会におけるルールと規範を認めつつ、一般の社会とリンクする場において、どのようなルールを合意するのか、その話し合いをつくりだし自己決定させるとりくみを必要とする。このとりくみを通して、ダーティーな社会においても人間として踏み越えてはいけない一線のあることを突きつけていくのである。西中における卒業生への指導や、牧本のN2中でのツッパリ指導に学ぶところが多い。

### 〈社会的義務と責任を、権利とセットで追及する姿勢〉

校内におけるアクティングアウトする子どもの場合も、ダーティーな社会を外につくり出す子どもの共通する指導は、彼らの発達要求としての行動と受け止め、発達に必要なケアと、特別な空間を保障することは、権利としてもに要求することが大切である。この活動と同時に、自己の権利を保障されながら、他者の権利を侵害しない生き方を、事件、出来事の指導を通して教えていくことである。

### (2) いじめと排除の子ども社会への切り込み

#### 〈日々のトラブルを平和的に解決するとりくみ〉

子どもたちは、日々、大小のトラブルを起こしながら生活しているが、その解決こそが社会形成の営みである。大人の感覚と価値観で解決を図ることも子ども社会のルール（今はないにもかかわらず）にまかせて放置することも、子ども社会をつくりだすものにはならない。子ども社会形成の意図をもった解決に当たっていくべきである。じゃんけんで負けた者はパンツを見せる遊びをしていた子どもの中で、負けたにもかかわらずモジモジする子を取り巻き、早くやれと怒っている子どもたちに、ジャンケンパンツの遊びを否定する指導は、大人の観点である。また、しょうもないことしてるなど、その場を破壊してすますのも良くない。負けてやらない子の問題を指摘し、参加する以上やるべきであるという立場こそ解決の場なのである。仲間内のハズシを否定するより、どうなったらハズシをやめるのかを問い、ハズシをする側の論理を子ども社会形成のすじにのせる指導こそ大切なのである。

しかし、他者への侵害行為については、徹底的に事実を明らかにする指導と、背景における子ども社会形成の指導とを区別していく必要がある。

また、男子の場合、遊びの中でのトラブルが表面化しやすく、指導チャンスが多いのに対し、女子の場合はひとたび表面化したら、すでに力関係が固定化し特定の子どもの排除という形になるケースが多い。このとき、排除することの問題を価値観として否定したところから指導を展開することは、女子の子ども社会をますます自閉させ、攻撃性を強めることになる。排除する側の社会形成が誰かを排除することを通して進められていることによって、必要以上の気づかいの世界に一人ひとりが抑圧されていることを実感させていく必要がある。同時に、前向きな価値の世界を広げる活動や討論の世界を広げながら解決に向かう見通しが大切である。この点では、今村実践は、自閉しがちな女子の関係を、価値論争の世界に引き込み、女子の少年期的正義の世界をつくりだしている。

### 〈ルールづくりに参加する義務と責任を教える〉

プロレス遊びなど子どもたちは手軽な遊びをするものである。とくに最近では競技スポーツに熱中しつつ少年期的遊びを中学校の3年生ぐらいでも結構やる。タワシサッカー、ゴムテープボールの野球、つかまえ、e t c。休み時間に興じる子どもたちの姿はまさに少年期であるが、危険であるとか、イジメにつながるとか、さまざまに否定されている。プロレス遊びはその最たるもので、技のかけ具合、頻度において、イジメの要素が多分に反映する。このとき、だからといって、プロレス遊びをやめさせるのではなく、ルールの下に展開させることも大切ではないか。カベに触ればロープであるとか、禁じ手をつくるとか、さらには遊びのわくを超えるものやルール破りを取り締まるリーダー性を求めていくとか。そして、仲間の中の権力者の民主的ふるまいをつくり出し、周辺で発生するイジメを解決させていくことなどが必要である。

子どもたちは、班長選出をはじめ様々な決定をジャンケンで決めようとする。ジャンケンで決めることの質の低さを嘆くより、ジャンケンという子ども社会の決定方法のもつ意味を教えることを通して子ども社会をつくり出すことが必要なのである。ジャンケンで決めようとしていることの意味と、その仕事の見通しを知り、ふさわしくなかったり無理な者になった時に、ひそかに支える人材がいること、負けた者が精一杯やって無理ならまたやり直していく方法など、参加する者の義務と責任においてジャンケンでは成立するものである。

### 〈係活動と班活動の再検討を！〉

このように考えたとき、班は集団を教える道具であり、係活動はその教材であったが、その集団は自治集団のイメージが強い。が、いま求められているのは子ども社会としての集団なのである。基礎的集団から一次集団への転換が求められ、さらに、少年期集団を教えていくものとして考えていく必要があるのではないかと思う。だとすれば、その編成は、自由編成の男女別班かもしれない。

係活動は、仕事をするために編成された班で、別編成の仕事の合理性、公平性を追及する自治に近いものを教えるための班として考えることも必要ではないかと思う。少なくとも、班づくりは再検討を必要としている。

### 〈リーダー指導のあり方をめぐって〉

これまでのように子ども社会の分析をするならば、そのリーダーとなる子どもは、子ども社会の中において、楽しい子ども社会の維持のために様々なトラブルの解決にあたり、ルールを改変し、社会崩壊者にはきびしく闘う者として育てつつ、思春期を見通した他者理解を広げさせていくものとなる。リーダー候補の目のつけ方を検討していく必要がある。

## 5. おわりに

少年期の子ども社会の変質を提起しつつ、正論に呼応できない子どもたちに、失望すること、傷つき一人悩むことをやめようと提起してきたのである。

アクティングアウトする子にとりくもうと提起しつつ、アクティングアウトする子をあきらめることにより、子ども（我々の対象である）への基本的信頼を崩壊させ、自らの心的外傷を受けてしまうことから脱け出していこうと提起してきたのである。

そして、子ども社会の再生を提起しつつ、子ども社会をもっと学び深めていくことを課題としているのである。京生研として、検証を期待する基調提案である。

(文責 藤木)